

第3学年 総合的な学習の時間 学習指導案

令和4年2月10日(木)

第3学年1組 29名

指導者：金城 勲

1 単元名 「いろいろな人の感じ方を知ろう」

2 単元の目標

知識及び技能	視覚障がいの擬似体験活動等を通して、障がいのある人の感じ方や考え方などを知り、相手にあった支援の仕方について考えることができる。
思考力,判断力,表現力等	障がいのある人の生活に着目させることで、自分たちにできることを考え、実践しようとする気持ちをもつ。
学びに向かう力,人間性等	障がいについて理解することを通し、多様性を尊重し、よりよい共生社会をつくる態度を身に付ける。

3 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	<p>①パラリンピックの精神を知るとともに、ルールや用具の工夫、サポートする人の存在に気付く。</p> <p>②様々な体験活動を通し、障がいのある人の感じ方や考え方を知る。</p> <p>③様々な体験活動を通して、障がいのある人の生活の工夫を知る。</p> <p>④様々な障がいについて調べたり、課題を見付けたり、追究したりすることを通して、様々な人々の生活や生き方に気付くことができる。</p>	<p>①障がいのある人の立場に立ち、自分たちにできる関わり方や支援の仕方を考えることができる。</p> <p>②障がいを多様性の一つとして捉えたり、それらの多様性について向き合ったりすることができる。</p> <p>③学習したことを基にさらに課題を見付け、調べたことを整理して、他者に伝えることができる。</p>	<p>①様々な体験活動などを自分事として捉え、問題を主体的に解決しようとする。</p> <p>②障がいのある人の生活について、主体的に調べることを通して、よりよい共生社会をつくろうとしている。</p>

4 研究主題に迫るための手だて

(1) 学習の流れについて

障がい者理解教育での先行研究では、以下の障害理解の段階が示されている。(徳田・1995)

①気付き→②知識化→③情緒的理解→④態度形成→⑤受容的行動

本単元では、障がいのある方の存在や障がいそのものに気付いたり知ったりする活動から始まる。今夏に行われた東京オリンピック・パラリンピックでは、多くの感動をよび、熱戦を繰り広げる各国の選手達の姿を児童たちも見ている。夏休み明けに学級ごとにパラスポーツを視聴し、日本代表のみならず各国代表の活躍の様子をみて盛り上がった。一方で、児童にとって障がいのある人や障がい自体を何となく知っている程度で、むしろパラスポーツアスリートと、一般の障害のある方々は違うと考えているように感じる。第3学年全体にとつた児童アンケートでは、障がいをもつ方に対して「かわいそう」といった回答が多く、また、「治してあげたい」という回答から、病気として認識している児童もいる。つまり、「障がい者」について学習する以前に、障がいとは何かを知識として身に付ける必要があると考える。

このような現状から、まずパラスポーツを通して障がいに対して興味や関心をもたせることから始める。そのために、手だて(2)として挙げている国際パラリンピック委員会公認教材である「I'm Possible」を用いた。

次に、「視覚障がいとはどういう状態なのか」という知識化②、さらに「視覚障がいのある人の生活はどのようなものか」の体験を通して情緒的理解③を促す。日常生活により焦点を当てることで、障害のある人の生活と児童の生活を比較し、自分ごととして捉えられるようにしていきたい。

情緒的理解では、児童に「かわいそう」や「苦しそう」などの理解とともに、共感、受容など相手の心に寄り添うものなども想定している。視覚障がい者の困り感や生きる知恵に共感し、相手を受け入れる態度を育成していく。

こういった素地を育むことで、児童自身の『障がいや障がいのある人に向き合った際に、何ができるかを考える』といった態度形成④につながると考える。

単元の終末には、行動の変容として受容的行動⑤、つまり「障がいの有無にかかわらず、ありのままの相手を受け止める、認めること」に近付くことができ、目指す児童像に寄与すると考える。

また、学習の最後には、視覚障がいを通して、不思議に思ったことや疑問だと思ったこと、他の障害などについて自分で調べ、ロイロノートにまとめ、発表する活動を設定している。体験活動で終わることなく、自らの学びに変え、社会の一員として自分たちにできることを考えようとする姿を引き出したい。

(2) 体験活動の充実

①パラスポーツ 「ゴールボール」、「ボッチャ」

本校では、これまで様々な身体障がい者アスリートを招聘し、児童に対してパラスポーツがもつ魅力を伝えてきた。令和元年度は義肢装具士と義足のアスリートと、令和3年度は義足の走り幅跳びのアスリートと交流を行ってきた。これまでの交流などと今回の障がい者理解教育をリンクさせて考えさせるために体験活動の充実を考えた。そこで、はじめに国際パラリンピック委員会公認教材である「I'm Possible」を用いてパラスポーツの価値を児童と共に共有し、「やってみよう」という意欲をもとにゴールボールとボッチャの体験を行う。これまでの本校での活動を背景にもつ児童であるがゆえに、より主体的に多くの価値を学び取ると考える。

②校内擬似体験

パラスポーツ体験を行った児童が次に取り組む体験は、視覚障がい者の生活体験である。この活動を通して視覚障がい者の日常生活へ着目させ、どのような困り感をもっているのかまたは適切な支援の仕方について考えを広げていく。児童の意欲によっては、家庭での体験も視野に入れ、別途「食事、お風呂、トイレ、服の着替え、洗濯物たたみ、掃除など」の体験を推奨させる。

5 単元計画・評価計画（総合的な学習の時間 15 時間、道徳科 1 時間扱い）

時間		学習内容	評価計画		
			知・技	思・判・表	態度
つかむ	2時間	1 国際パラリンピック委員会公認教材「I'm Possible」を活用した学習 ◎「パラリンピックってなんだろう」 ◎「パラリンピックスポーツについて学ぼう」	①		①
取り組む	7時間	2 視覚障がい体験活動 ◎「パラスポーツをやってみよう①」 パラスポーツを体験して、パラスポーツの工夫について知る。(ボッチャ) ◎「パラスポーツをやってみよう②」 パラスポーツを体験して、視覚障がい者の苦労や工夫を体験的に学ぶ。(ゴールボール)	①		①
		道徳科 (1 時間) ◎視覚障がい方をテーマにした道徳の学習を行い、視覚障がいの特性を知るとともに、相手のことを思いやり進んで親切にしようとする心情を育てる。また、これからの学習の計画を知る。 ・教材「さしのべた右うで (かがやけ 3 年・学校図書)」 ・擬似体験の説明 ◎視覚障がい体験をしよう① (本時) ・日常生活に沿った体験をする。 ・コインあて体験をする。 ◎視覚障がい体験をしよう② ・アイマスクを装着する側とガイドする側に分かれて、玄関から教室までの歩行体験を行う。	②	①	
まとめる	6時間	3 課題を見つけて、広げよう ◎体験活動で学んだことを共有する。 ・前時までの学習の振り返りをもとに、体験をして感じたことや、疑問に思ったこと、すごいと思ったことを KJ 法を用いて班で整理し共有する。 ・共有したことをもとに、KWL シートを完成させる。 K・・・知っていたこと W・・・学びたいこと L・・・学んだこと ◎調べたい課題を見つけ、計画を立てる。 ・前時の KWL シートを基に、自分更に課題を見つけ、探求的な学習に移行していく。 児童の今後の調べ学習の系統としては ○障がいの状態や種類 (目が見えないについてもっと知りたい、目の不自由な人だけでなく、耳の不自由な人、足の不自由な人について知りたい) ○日常生活で困ることの調査 (目が見えないと困ることはどんなことかな、生活していく中での工夫) ○援助方法や支援のありかたを考察 (目の不自由な人のために工夫されているもの、目の不自由な人のために自分ができること) などが挙げられる。 ◎調べたことをロイロノートにまとめる。 ◎学級内でまとめたことを発表する。	④	② ③	②

6 本時の指導（5／15）

○本時の目標

- ・体験活動を通して、視覚障がい者の感じ方や考え方を知る。
- ・様々な体験活動などを自分事として捉え、問題を主体的に解決しようとする。

○本時の展開

	学習内容	○指導上の留意点 ☆評価【評価方法】
導入	1 あいさつをする。 2 本時のめあてを知る。	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px auto; width: 80%;"> 目の見えない方の生活を体験しよう。 </div>	
展開	3 学習の流れを確認する。 日常生活に沿った展開を行うことを確認する。	○アイマスクの使い方について説明する。
	4 視覚障がい体験を行う。 ①指定されたものを机の中から出し、机の上に置く。 T：アイマスクをしたら、算数の教科書とノートを机から取り出し、机の上に置きましょう。 T：次に教科書〇〇ページを開きましょう。 T：ノートの準備をしましょう。 T：今行った活動で感じたことを話し合しましょう。またどのような工夫があれば準備しやすいか話し合しましょう。 ②配布された紙に、自分の名前を指定された場所に記入する。 T：筆箱を机の中から出します。 次に、鉛筆を一本取り出します。 T：ペアの人が相手に指示を出し、名前を書かせます。 T：今行った活動で感じたことを話し合しましょう。またどのような指示があればよかったか話し合しましょう。 ③買い物の場面を想定し、必要な金額になるように硬貨の選別をする。 T：これから硬貨を使って、買い物をします。お菓子を買って、代金は527円でした。アイマスクを付けた状態で、足りるように硬貨を選びましょう。 T：今行った活動で感じたことを話し合しましょう。またどのような点に注目して硬貨を選んだかを話し合しましょう。	○①の体験では教科書や置く場所を指定して、日常生活では視覚に頼ることが多いことを理解させる。印刷された字は、触覚では識別できないことを知り、そのことから点字やユニバーサルデザインなどの意義を知る。 ○②の体験では、指示を出すことの難しさを感じさせる。適切な支援で大切なことは、相手の立場に立つことであることを意識させる。 ○③の体験では、触覚によって正確に状況を把握することの難しさを感じさせる。 ☆①様々な体験活動などを自分事として捉え、問題を主体的に解決しようとしている。【観察】 ☆②様々な体験活動を通して、障がいのある人の感じ方や考え方を知ることができている。【ワークシート】
	5 振り返りを書き、共有する。 C：目の見えない人の感覚が分かった。 C：想像よりも難しいと感じた。 C：お金には凹凸があって、それを基に判別できた。	○児童の率直な思いや考えを大切に、教師の一方的な教え込みにならないようにする。
まとめ		

